特　別　企　画

滝廉太郎が富山を去って125年記念

富山と滝廉太郎

天才作曲家として名高い滝廉太郎は、
多感な少年時代の約２年間を富山で過ごしている。
当時、彼が通っていたのは、荒れ果てた富山城址内にあった小学校。
その時の四季折々の様々な体験は、
後の彼の作曲活動に少なからぬ影響を与えたにちがいない。
滝廉太郎が父親の非職にともない、富山を去ってから１２５年。
富山ゆかりの作曲家として、県民･市民の意識を高め、
顕彰していくことが、文化的な街づくりにつながるのではないだろうか。

― 滝廉太郎　年表 ―

1879（明治12）年　8月24日
東京都芝区南佐久間町に生まれる。
1882（同15）年　11月
父が神奈川県書記官となり、横浜に転居。
1886（同19）年　8月
父が富山県書記官に栄転となり、富山市に転居。
9月　富山県尋常師範学校附属小学校1年に転入。（7歳）
1887（同20）年　2月
父が知事代理となる。
1888（同21）年　4月
父が非職を命じられる。
5月　傷心のうちに富山を離れ、東京へ転居。東京市麹町小学校3年に転入。
1889（同22）年　3月
父が大分県大分郡長に任じられる。（廉太郎は、祖母、病弱の姉らと東京に残る）
1890（同23）年　5月
廉太郎も、大分に転居。大分県師範学校附属小学校高等科1年に転入。
1891（同24）年　11月
父が大分県直入郡長に転じる。
12月　一家、豊後竹田へ転居。
1894（同27）年　5月
上京し、音楽学校受験準備のため芝区愛宕町の「芝唱歌会」に入会。
9月　東京音楽学校（予科）へ入学。
1895（同28）年　9月
同校本科へ進学。
1898（同31）年　7月
本科を首席で卒業。9月に研究科入学。
1899（同32）年　9月
音楽学校嘱託となる。（20歳）
1900（同33）年　6月
ピアノ・作曲研究を目的とし、満3カ年のドイツ留学を命じられる。この年、「荒城の月」「花」を含む組曲「四季」「箱根八里」「お正月」など、多数作曲。
1901（同34）年　4月
ドイツ留学へ出発。
10月、ライプチヒ王立音学院入学。
1902（同35）年　10月
病気のため、ドイツより横浜港に帰省。大分市の父母のもとで療養。
1903（同36）年　6月29日　病死。
（23歳10カ月）

貴重な少年時代を過ごした富山

東京で生まれた滝廉太郎は、明治政府の官僚だった父の栄転にともない、3歳で横浜へ、そして7歳の時には富山へ引っ越した。父が、富山県書記官（副知事）に任命されたためである。

当時、廉太郎少年が通っていたのは、富山県尋常師範学校附属小学校（以下、付属小学校）。旧富山城内の旧富山藩の藩校・広徳館の跡（現在の富山税務署のあたり）にあり、廉太郎は、小学校1年生の途中から3年生の途中までこの学校に通っていた。

富山城は、藩政時代は現在の城址公園の約6倍の広さがあった。しかし、明治6年に廃城となり、三の丸の払い下げが行われるなど、解体が進んでいた。本丸御殿や石垣、時鐘台、内堀は残されていたものの、必要のなくなった外堀は埋め立てられ、富山県中学校や県会議事堂等の新しい建物が建てられていったのだ。

一方、城跡の北側には、当時はまだ神通川の本流が流れており、一帯には豊かな自然があふれていた。（神通川の馳越線工事による直線化は明治36年に完成。かつての神通川河道は戦前の都市計画で埋め立てられ、名残として残された川が現在の松川である）

▲滝廉太郎が富山に住んでいた頃の富山城址の様子（絵は明治16年頃）。石垣や時鐘台が見える。

この富山の情緒豊かな景色を見ながら、廉太郎少年は毎日、小学校へ通っていた。そして、彼は明治という新しい時代の到来で破壊されていく旧体制の遺構「富山城」や、変わり行く街並みをその目に焼き付けたに違いない。

廉太郎少年が北陸・富山に来て、初めて見たのが雪景色。20歳頃、廉太郎は組曲「四季」を作曲しているが、その中の「雪」は富山時代の冬を思い起こしたものと言われている。また、有名な「花」も、歌われているのは墨田川だが、春うららの神通川（今の松川のあたり）を上り下りしている舟人を連想したかもしれない。

さらに、「お正月」、「雪やこんこん」、「桃太郎」などの幼稚園唱歌も富山にいた頃をなつかしんで作ったと言われ、富山は後の滝廉太郎の作曲活動に大きな影響を与えた場所だといえる。

郷土史家の八尾正治氏は、『荒城の月とととやま』（社内誌への寄稿文・昭和51年）の中で次のように述べている。

「人は長じて、持った才能を発揮するがその素地は幼少の頃に培われるという。天才廉太郎の音楽的才能を育て、それを伸ばしたものはとやまの美しい自然であり、豊かな人情と風物だったとはいえまいか」

滝一家は、明治21年4月、父・吉弘の非職にともない、富山を去った。非職の原因は、吉弘と初代富山県知事の国重正文氏との溝が深まったためとも言われるが、大黒柱が職を失ったことは、滝家に暗い影を落としたことは間違いないだろう。廉太郎少年にとって、富山はまさに父の栄枯盛衰を味わった場所でもあったのだ。

滝廉太郎をめぐる富山の動き

1977（昭和52）年　11月
グッドラック創刊。

1979（昭和54）年　6月
富山県九州人会が、滝廉太郎の生誕100年を記念し、富山市丸の内1丁目の堺捨旅館（現・マンション堺捨）前に、滝廉太郎の少年像を建立。

1988（同63）年　4月
松川遊覧船の就航にあたり、松川（当時は神通川）べりの尋常小学校へ通っていた滝廉太郎にちなみ、船を「滝廉太郎丸」、「荒城の月丸」と命名。テーマ曲に「荒城の月」「花」などを選ぶ。

1989（平成元）年　1月
『グッドラックとやま』発行人・中村孝一が〝「荒城の月」のモデルは富山城だ〟の新説を発表。全国のマスコミにも大きく取り上げられる。

9月　全国タウン誌会議富山大会で創作劇「荒城の月と富山城」が上演。

1990年（同2年）11月　「荒城の月のモデルは富山城」との説が、小学館発行「日本大百科全書」に掲載されることが決定。

1991（同3）年　2月
中村孝一が富山県内の文化・経済界および行政関係者に呼びかけ、「滝廉太郎ブロンズ像建立委員会」を設立。（委員長／新田嗣治朗氏）

1992（同4）年　8月
富山県民会館にて「第1回滝廉太郎祭」を開催（以後、毎年開催）。〝荒城の月誕生のロマンを探る〟と題し、シンポジウムを行う。

1993（同5）年　「滝廉太郎記念館」をオープン。

1994（同6）年　松川に大型船「滝廉太郎Ⅱ世号」が就航。

2003（同15）年　9月
滝廉太郎の没後100年と神通川直線化100年を記念し、松川べりにて「リバーフェスタ」「川と街づくり国際フォーラム」を開催。

2011（同23）年　3月
『グッドラックとやま』創刊400号を記念し、特集「滝廉太郎来富125周年記念　滝廉太郎と富山」を掲載。

富山でも滝廉太郎の顕彰活動を

昭和63年、松川に「滝廉太郎丸」が浮かぶまで、日本を代表する作曲家の一人である滝廉太郎が富山に住んでいたことは、残念ながら富山県民・市民にはほとんど知られていなかった。しかし、同じように少年時代の約2年間（12歳から14歳）を過ごした大分県竹田市では、滝廉太郎を顕彰する音楽祭を昭和22年から開催するなど、顕彰活動が盛んに行われており、岡城址は「荒城の月」のモデルとして有名になった。

▲小学校跡（富山市丸の内1丁目）に建つ、滝廉太郎の少年像と「滝廉太郎 修学の地」と書かれた看板。

富山での滝廉太郎の顕彰活動が目に見えるかたちとして現れたのは、昭和54年の滝廉太郎少年像の建立である。しかし、発起人は富山県九州人会であり、富山の人々に広く知られることはなかったようだ。

しかし、滝廉太郎と富山の関わりについては、幾人もの専門家たちが書物の中で指摘していた。

「城内の官舎から学校までは僅かの距離で、廉太郎はこの城跡と学校を中心に1年8カ月の富山生活を送ったわけである。

後に作曲した『荒城の月』の最初のイメージはこの富山城址であったのかもしれない」
（『滝廉太郎の生涯』堀正三著　いずみ出版　昭和49年）

「…『荒城の月』の曲想をはぐくんだのは、岡城址だったかも知れない。しかし、私は、最初のイメージは幼き日を過ごした富山城跡に違いないと信ずる。そんなことから、富山城跡にも〝荒城の月の碑〟があってもいいのではなかろうか」（『荒城の月とともやま』八尾正治〈社内誌への寄稿文〉　昭和51年）

「にぎやかな東京（横浜）から来たら富山の城下町はさびしいの一言に尽きる。しばしば近くにある富山城跡（すでに公園となっている）へ散歩に出かけたり、城壁の上へのぼって立山を仰いだり、市街を見渡したりしたことであろう。そんなことを考えると、廉太郎が『荒城の月』の歌に向かった時、富山城跡の石垣が青い月光にぬれていたイメージが絶対に浮かばぬと誰が言い切れるか。筆者は詩人の一人としてこれを否定できない」
（『総曲輪懐古館』八尾正治・水間直二・山岸曙光著　巧玄選書　昭和54年　※山岸曙光氏の文章より）

以後、平成になってからも上記のような顕彰活動が行われているが、県民・市民に広く浸透するまでには至っていないのが現状である。また、多くの方々からの善意のもと制作された「滝廉太郎ブロンズ像」が、未だにゆかりの地に建立できないなど、課題もある。

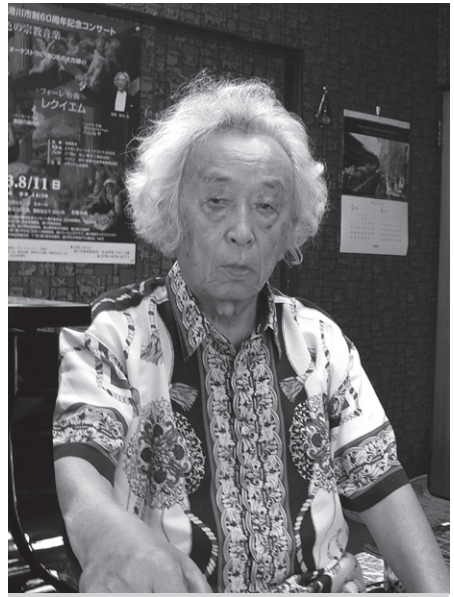
今後、富山が文化都市として成熟していくために、ゆかりの先人を顕彰していく姿勢は欠かせない。富山で暮らしたのが少年時代の1年8カ月とはいえ、23年10カ月という短い生涯だった滝廉太郎。偉大な音楽家を育てた街として、誇りをもって全国に紹介していきたいものである。GL

サクラパックス(株)

楽聖・滝廉太郎を偲ぶ

滝廉太郎を顕彰し、文化の香り高い富山に

浅岡　節夫 さん（音楽家）
◎インタビュアー／中村孝一



［プロフィール］
昭和38年より丘声会を主宰。丘声会オペラ協会会長、県オペラ協会名誉会長などを務め、数多くのオペラ、合唱を指揮し、国内外で活躍する多くの声楽家を育成。2011年11月に地域文化功労者 文部科学大臣表彰を受けた。

中村　浅岡先生には、「滝廉太郎記念　富山音楽祭」でプロデューサーを努めていただくなど、これまでも滝廉太郎の顕彰活動にご尽力いただき、誠にありがとうございます。今年は、廉太郎が富山を去って125年目ということになりますが、先生もお父様の転勤で各地に行かれたそうですね。

浅岡　父は富山市の出身ですが、東京で官吏をしていましてね。山形に転勤になってから私が生まれたのですが、その後、4歳で満州、5歳で川崎、小学校へ上がる頃に東京へと移りました。小さい頃の記憶はあやふやだろうと言う人もいますが、変化が多かったせいか、私はその当時のことを今も鮮明に覚えているんです。滝廉太郎も父親の転勤が多かったですし、きっとそうだったのではないかと思いますね。

中村　例えば、どんなことを覚えておられますか？

浅岡　小さい頃にいた山形は、後に当時の近所の地図を書けるほどで、父がビックリしていました。満州では4歳でしたが、寒かったので特に暖房器具のことをよく覚えていますね。新しい家ではスチームだったとか（笑）。

その後、5歳のとき満州の治安が悪化し、子どもだけで川崎の叔父のところへ帰されたのですが、その頃の記憶が一番強いです。というのも、通っていた幼稚園が教会で、朝からずっと音楽漬け。音楽の本には載っていないけれど、素晴らしい歌がたくさんあったんです。現在の私の原点は、そこにあるように思いますね。

中村　その頃の先生の年齢というと、滝廉太郎が富山にいた頃と近いですよね。

浅岡　そうですね。7歳になって小学校へ通うようになったのは東京に引っ越してからなのですが、その頃は音楽的に感性の鋭い頃だったと思います。当時は国民唱歌というのが出始めた時期で、その歌を今でもきれいに覚えているくらいですから。

中村　富山でも、市民の方が滝廉太郎をもっと身近に感じて、ゆかりの作曲家として誇りに感じていけたら良いのですが…。まだまだ、関心が低いように思いますね。

浅岡　やはり富山にいたのが子どもの頃ということで、文献など絶対的なものに記録される年齢ではなかったからでしょうか。けれど、富山で少年時代を過ごし、感性の面で十二分に影響を受けたのは絶対的な事実ですし、もっと自信を持って、滝廉太郎と富山の関わりをアピールしていってもいいと思いますよ。

中村　やはり、目に見える形で、滝廉太郎を顕彰していくことが、より多くの皆さんに知っていただけると思うのですが…。

浅岡　そうですね。そういったことが、富山の文化的レベルの評価にもつながっていくと思います。

中村　9月22日（日）に、滝廉太郎記念の「リバーフェスタ」を松川べりで行いますが、これからも一人でも多くの市民の方と一緒に滝廉太郎を顕彰していけたらと思っています。ありがとうございました。GL